

Title	古今集時代における「松を引く」表現の出現 : 子日 行事との関わりを中心に
Author(s)	蒲, 姣艶
Citation	語文. 2019, 113, p. 1-12
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/77683
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

古今集時代における「松を引く」表現の出現

子日行事との関わりを中心に――

蒲

艷

天慶六年四月のないしの屏風のうた十二首

(『貫之集』

I 190番)

③ちとせといふ松を引つ、春の、のとをさもしらず我はきに

けり

内御屏風和歌はしめのねのひ。

(『貫之集』 I · 51番)

④ねたく我子日の松にならましをあなうらやまし人にひか

電がたなびくことと、引く松とが掛詞となっている。(2)

延喜十七年の冬なかつかさの宮の御屏風の歌

子日

①春霞たなびくまつの年あらばいづれの春か野べにこざらん

延長四年九月法皇の御六十賀京ごくのみやすどころのつ

(『貫之集』·91番

かうまつり給ときの御屏風のうた十一首

ねのひ

ものである。古今集時代においては、次に示すように、紀貫之、凡 河内躬恒に「松を引く」和歌が六首確認できる。なお、①②では

しかし、「松を引く」表現は古今集時代にならないと、見られない 松という歌材は和漢ともに愛誦され、古くから用いられている。

一、はじめに

兼輔朝臣なくなりてのち、土佐の国よりまかりのぼりて、

(『躬恒集』 I · 97番

悲しき

⑥『土佐日記』·正月二十九日 (5)

②花に、ずのどけき物は春霞たな引のべの松にぞ有ける

姣

⑤ひきうゑしふたばの松は有りながら君がちとせのなきぞ かの粟田の家にて(4) 《『後撰集』・巻二十・哀傷歌・ **州番・貫之**)

1

・ こご といへども、海中なれば、かたしかし。ある女の書きな」といへども、海中なれば、かたしかし。ある女の書き正月なれば、京の字の目のことをいひ出でて、「小松もが

しものをおほつかな今日は子の日か海女ならば海松をだに引かま

ある。

とぞいへる。海にて、「子の日」の歌にては、いかがあらむ。とぞいへる。海にて、「子の日」の歌にでは、いかがあらむ。ない、この表現がどのような経緯で形成されてきたのかについない。また、田島智子氏は子日について、古今集時代から拾とば歌枕大辞典』「子の日」と「松」の項目においても、言及されていない。また、田島智子氏は子日について、古今集時代から拾とば歌枕大辞典』「子の日」と「松」の項目においても、言及されていない。また、田島智子氏は子日について、古今集時代の和歌に初めて現れているが。また、田島智子氏は子田について、古今集時代の和歌に初めて現れているが、この表現がどのように生まれてきたのといるが、この表現がどのように生まれてきたのといった。

をたどった。

二、「松を引く」表現と子日行事との関係性⑴

られない。 しかし、古今集時代に先行する和歌例では、「松を引く」表現が見 松は和歌の歌材として、『万葉集』から、すでに多用されている。

を引く」六首が、引用の囲み部分で示したように、子日行事と深たのか。それを考える上で注目したいのは、第一節で示した「松では、どのような要因があって、「松を引く」表現が生み出され

「松を引く」表現が生れてきたのかということを追究する必要がのような関わりを持つのか。その関わりの中で、どのようにして、く関わっていることである。子日行事と「松を引く」こととはど

にあったにせよ、いつか外来思想は消えうせて日本化の一路ないが、平安朝に入ると、これがその起源はたとい大陸行事この儀は中国から入ったものか日本民間のものか明らかでは

行事のきっかけを、以下のように推定している。 し、北山円正氏は史料を追いながら、平安朝に流行し始めた子日また、倉林正次氏も同様の立場である。このような研究状況に対また、倉林正次氏も同様の立場である。

世俗の習慣に風趣を認めて徐々に貴族社会が取り入れ、やがなして良いかもしれない。ただそれ以前に子の日の遊びはよなして良いかもしれない。ただそれ以前に子の日の遊びはよると、宇多天皇の北野・船岡山への行幸が端緒であったと見て立てあげたところに意義を認めるべきなのではあるまいか。

谷口孝介氏も同様の立場から論じている。以下、この北山氏のて自らの優雅な行事にまで高めたと言えよう。

「松を引く」表現が生まれてきたのかを検討する。論を参照しながら、子日行事との関連の中で、どのようにして、

める。 子日行事について記した最古の例は、以下の『万葉集』の例で

(巻二十・493・家持)

見える「玉箒」がこの宴と深く関わっている。り、この例は子日の宴に関する最古例である。題詞にも和歌にもどを召して、内裏の東の対屋の垣下で宴を開いたという記述であ天平宝字二年(七五八)正月三日子日に、天皇が侍従・王臣な

子日行事との関わりは窺えない。 生活が親蚕の儀を行う時に用いるもので、皇后自ら蚕室を掃うことによって、養蚕を奨励しその豊穣を祈ったとのことである。しとによって、養蚕を奨励しその豊穣を祈ったとのことである。しまによれば、「玉箒」は蚕の床を掃くためのものであり、

差裁云≛厶二प≡ (人一三) 三引豆之。由 宴後及。 ♂ て人衣被。正月庚子。曲宴。賜□侍臣衣被。平城天皇大同三年(八○八)正月戌子。曲宴。賜□五位以上

武 ・等。 易 录音 · ≦:。 嵯峨天皇弘仁四年(八一三) 正月丙子。 曲π宴後殿 。 令∷

賦」詩。賜」禄有」差。

乀戶(乀一乀)E引甲子。由_宴夋嵳。 五年(八一四)正月甲子。宴;[侍臣]。賜ュ綿有ュ差。

淳和天皇天長八年(八三一)正月壬子。八年(八一七)正月甲子。曲┐宴後庭

天皇曲┐讌仁壽

参

議以上預焉。賜、禄有、差。

文徳天皇齊衡四年(八五七)正月乙丑。

禁中有

曲宴。

||之子日態||也。今日之宴。脩||舊迹||也。||老不」過||公卿近侍數十人|。昔者上月之中。必有||此事|。時謂

はないかとも考えられる。
ここに挙げられているのは「子日曲宴」の例であり、これらが
はないかとも考えられる。
とから、この頃までには、子日の宴会は既に廃絶していたので
られる。更に、斉衡四年(八五七)の記事には、「昔者上月之中。
られる。更に、斉衡四年(八五七)の記事には、「昔者上月之中。
られる。更に、斉衡四年(八五七)の記事には、「昔者上月之中。
られる。
とから、この頃までには、子日の宴会は既に廃絶していたので
とある
とから、この頃までには、子日の宴会は既に廃絶していたので
ことから、この頃までには、子日の宴会は既に廃絶していたので
とある

以下のように記している。『菅家文草』36「早春、觀、賜、宴宮人、同賦、催粧、應、製」で、『菅家文草』36「早春、觀、賜、宴宮人、同賦、催粧、應、製」で、同じく子日について、『類聚国史』の編者とされる菅原道真は、

宴』。臣伏惟、自」觴;,王公於正朝,至」喚;,文士於內宴,首尾聖主命;,小臣,分;,類舊史,之次、見」有;,上月子日賜;,菜羹,之

陰者助;;陽之道、柔者成;;剛之義;也。 二十餘日、 治歡言」志者、 諸不」及二婦人、此唯丈夫而已。 況亦野中芼」菜、 世事推 夫

||之蕙心|矣。爐下和」羹、

俗人屬二之夷指一。

宜哉、我君特分二

この序文は『本朝文粋』巻九・沿にも収録されている。 斯宴、獨樂;;宫人;矣。 (略) 寛平五

参加する機会を与えるために、「宮人」を楽しませる宴を行ったと

いう主旨である。この宴において、実際に若菜を摘んで、それを

年(八九三)正月二十日余り、男性のみの行事が続き、女性にも

とその日の風習である若菜を摘むことを意識して書いたものであ 働きを称揚している。傍線部①②から、この序文は、道真が子日 部②では、若菜を摘み、羹を和すという世俗風習の中での女性 ることがわかる。 に若菜の羹を賜う宴の記事を見たと記述されている。また、傍線 羹 | 之宴 _ 」とあるように、道真が「舊史」を整理する時に、 羹に和す様子は窺えないが、 傍線部①に「見」有上上月子日賜□菜 子日 0

以上の例から、 之宴」となって復活していたのであろうか。子の日の宴が再 であるかを明らかにはできないが、子の日の宴は「賜 を執筆したということなのかもしれない。あるいは、 ために、 行事には、「賜,|菜羹,|之宴」があるという認識をもっていた あったと書いたのであろうか。想像をめぐらせば、子の日 道真は何らかの誤認をして、「上月子日、 現在の宴と過去の宴との明確な区別をせずに、 北山氏は以下のように指摘している。 賜。菜羹。之宴」 いつ頃 菜羹 詩序 が

0

謹序。

が、子日に若菜を摘み、 のが妥当であろう。 菅原道真が序文を記述した当時の子日行事の実態は分からない 興したのだとすれば、それを働きかけたのは道真であろう。 羹を和す風習があったのだろうと考える

六日子日に関しては、『菅家文草』 43 同じ菅原道真による記述であるが、寛平八年(八九六) 聊叙、所、観」において、以下のような記述が見える。(ユタ) 「扈」従雲林院」、 閏正月

門、成,,功徳,也。侍臣五六輩、翫, 雲林院者、昔之離宮。今為;佛地。聖主玄覽之次、不」忍」過」 唯至心與; 稽首 ; 而已。 掃川苔癬」以恭敬。 供奉無」物、 予亦當聞, 唯花色與||鳥聲|。 |風流 |而隨喜、院主一兩僧 上回 拝謝有 一陽子日、

月、 之難」犯。 之難」犯。和□菜羹□ 風、廻」與有」時、走」筆無」地。聊舉,一端、文不」加」點云爾 日之為、豈非。為;無為,、事。無事。乎。予雖;愚拙, 久習 一歳餘分之春、 ||菜羹||而啜レ口、 月之六日、 其儀如何、 百官休暇之景。今日之事、 期;;気味之克調,也。 以摩」腰、 況年之閏 習 風霜

なった模様が記されている。 は相当な広がりを持っていた」と述べている。 まで、また都はもとより地方においても行っており、 及」の「端緒」となって、これ以後、「天皇から受領・女房に到る はこれのみである。北山氏はこれが「貴族社会における子日の普 寛平八年(八九六)閏正月六日子日に字多天皇一行が野遊を行 天皇が野外に出て子日行事をする例 北山氏の論は首肯 貴族社会で

て、「松を引く」表現が現れてくる経緯を説明しよう。目していない。ここでは、子日行事に触れながら、それと関連しできるが、氏は主に子日行事の展開を追求して、表現の面には着

第平八年(八九六)関正月六日子日の序文から、道真は「上陽子日」の実質を
「行」が表」の言葉として説明している。子日行事の当時のについて、「故老」の言葉として、「故老」が答えた②「倚」松樹」以摩」腰」と
「和」、菜羹」、而啜」口」との二つが提示されている。一つは②「倚」、松樹」以摩」腰、習」、風霜之難」、犯」とあるように、松に腰を摩ることにより、冬の寒さにも色を変えない松の生命力を身につけようとすることである。一つは③「和」、菜羹」、而啜」口、期身につけようとすることである。一つは③「和」、菜羹」、而啜」口、期身につけようとすることである。一つは③「和」、菜羹」、而啜」口、期身につけようとすることである。一つは③「和」、菜羹」、而啜」口、期息により、体の調子を整えようとすることである。若菜を薬草と認識していたのであろう。道真が言う子日行事とは、長寿を願うものであると考えられる。

察する。 察する。 を引く、それ以降の古今集時代に現れてくる「松を引く」もわかる。では、寛平八年(八九六)年宇多天皇の子日野遊に見もわかる。では、寛平八年(八九六)年宇多天皇の子日野遊に見らるがある。 また、子日行事は野辺で行われることのの下文から、子日行事に、松と若菜との二つの題材が深く関

三、「松を引く」表現と子日行事との関係性②

若菜の類を摘んで、天皇に献上したことがわかる。存する。「其儀如」初」についての具体内容は不明であるが、野でこの記述はかなりの部分が破損しており、意を取り難い箇所が

下扈從。喚,,詩臣,。賦,,即事,。云々。

・ 大臣以行っている。この子日行事については、『日本紀略』に記録がある。
また、延喜五年(九〇五)正月宇多天皇が大覚寺にて子日遊をまた、延喜五年(九〇五)正月宇多天皇が大覚寺にて子日遊を

ら見られるが、実際子日行事との関わりは以上の記述からはまだ性は、寛平八年(八九六)子日に、故老が道真に言う記述の中か皆は、寛平八年(八九六)子日野遊と延喜五年(九○五)子日遊から、子寛平八年(八九六)子日野遊と延喜五年(九○五)子日遊から、子寛平八年(九○五)子日野遊と延喜五年(九○五)子日遊から、子の見られるが、実際子日行事でも野辺で、「野菜」を摘んだよう延喜五年(九○五)子日行事でも野辺で、「野菜」を摘んだよう

宇多天皇の子日野遊に見られる松の例が、その後の子日に関わる 子日に関わる松詠が流行したと考えられる。寛平八年(八九六) 菜を詠む例は二例で、松を詠む例は十一例もある。古今集時代に 松詠に影響を与えたのだろうか。また、どのような経緯で「松を 古今集時代には、子日を詠む和歌は計十八例ある。そのうち、若

を明記した例を【表一】に示した。 目して考察する。『万葉集』における松詠の中で、松が生える場所 その点について検討するために、ここでは松が生える場所に着 引く」表現が生まれてきたのだろうか。

【表一】『万葉集』における松の場 計三十二例

松が詠まれる場所	用例数	
浜辺	10	
きし	4	
Щ	7	
いそ	3	
いはほ	1	
ひめしま	2	
松原	1	
ひばら	1	
いはやど	1	
みね	1	
のなか	1	

として、浜・岸・山など様々であるが、その中で囲み部分で示し している。一方、【表一】から、『万葉集』では、松の生える場所 たように、「のなか」が一例ある。その和歌を以下に示す。 寛平八年 (八九六)宇多天皇の子日野遊では、 野辺の松に言及

> 磐代之 野中尓立有 7 結松 情毛不解に 45ピマツココロモトケズル!結松 哀咽歌二首

(『万葉集』・巻二・14

「むすびまつ」と表現されており、ほかの『万葉集』の表現と類似この和歌では、松の生える場所は野中であるが、「松」に関して、 していて、「松を引く」表現の先蹤としがたい。また『万葉集』以

降、『古今集』までの和歌例には、野辺の松を詠むものがない。 これに対し、古今集時代には、子日に関する松詠は十一首ある。

その十一首を左に示す。

延喜十七年の冬なかつかさの宮の御屛風の

子日

(1)春霞たなびくまつの年あらばいづれの|春か野べ

延喜十九年東宮の御屏風の歌、うちよりめしし十六首 (『貫之集』・91番

(2)春の色はまだあさけれどかねてより緑ふかくも染めてける 子日の松のもとに人人いたりあそぶ

かな

延長二年五月中宮の御屏風の和歌廿六首 (『貫之集』・

127番

子日

(3)もとよりのまつをばおきてけふは猶おきふし春の色をこそ

みれ

承平五年十二月、内裏御屏風の歌、仰せによりて奉る 子日して、車のわかるる所に馬にのれる人、まつをく

るまにおくる

(4)此松のなをまねばれば玉鉾の道わかるとも我はたのまむ (『貫之集』· 324番

延長四年九月法皇の御六十賀京ごくのみやすどころのつ

かうまつり給ときの御屏風のうた十一首 ねのひ

⑤花に、ずのとけき物は||春霞たな引のべの松||にぞ有ける (『貫之集』 Ι

天慶二年さいさうの中将屛風の歌廿三首 山里にすむをんな子日する

(6)あしひきの山べの松をかつみれば心を|野べ|におもひやる

かな

延喜二年倭月令御屏風之料歌四十五首之内依勅奉之 (『貫之集』 I・47番)

子日野遊

⑦君がためおもふこゝろの色にいでゝまつのみどりをおりて けるかな

(『貫之集』Ⅱ・1番)

京極の宮す所つかうまつりたまふ御屏

である。

風の歌

亭子院六十御賀、

子日したるところ、松のいとちゐさきに

(8) ふたばよりとしさだまれるまつなればひさしき物とたれか

『伊勢集』 I

74 番

八条大将四十賀、権中納言のし給

みざらん

子日松いへにうゑたるところ

(9)ちとせふるまつといへどもうゑてみる人ぞかぞへてしるべ かりける

内御屏風和歌、はしめのねのひ

(『伊勢集』 I・184番)

⑪ねたく我子日の松にならましをあなうらやまし人にひか

(1) 『土佐日記』・正月二十九日

(『躬恒集』 I・97番

正月なれば、京の子の日のことをいひ出でて、「小松もが な」といへども、海中なれば、かたしかし。ある女の書き

て出だせる歌、

おぼつかな今日は子の日か海女ならば海松をだに引かま

しものを

える場所は「野」である。また9では、松が詠まれる場は「家」 る。その中で、(1)5)6(7)では、囲み部分で示したように、松が生 これらの歌で、松が詠まれる場所を明記しているのは、

六首あ

とによって、子日と松の繋がりが強固に認識され、それが貫之ら の松詠を生み出した要因の一つとなったのではなかろう に、それ以前から子日と松は関係があったと思われる。そしてさ るのではないかと考えられる。 その一方で、寛平八年(八九六)宇多天皇の子日野遊に見える このように、 は、 宇多天皇による子日野遊が、道真の序に取り上げられたこ 宇多天皇の子日 子日 の松詠には、 野遊で、 道真の序で「故老」が述べたよう 野辺の松が記されたことと関 野辺の松が詠まれるようになる

表現されている。 倚,松樹,以摩,腰 の要素は和歌には見られず、「松を引く」と

のか。 を引く」先例自体がないため植物を引くという行為はどのような な行為なのかということを確認しなければならない。しかし、「松 Ŏ では、「松を引く」表現は一体どのようにして生み出され (1足日木能 石根許其思美なのか、を検討する。 それを考えるためには、まず「松を引く」ことはどのよう れてきた

(2)真葛延 小野之浅茅乎 自心毛 人引目八面 (『万葉集』・巻三・ - 14番・家持) ・41番・家持)

菅根手

引者難

標耳曽結焉

(3) 奴々伊ィ /利麻治 和尔奈多要曽祢 於保屋我波良能オホャガハラノ 産我波良能 伊波為都良 比可婆奴流(『万葉集』・巻十一・踯番・詠者不明)

字ゥ 都ッ 世七 美波沙 恋乎繁美登 春麻気氐 念繁波 引攀而コピラシゲミト ヘルマケテ オモビシアン ヒキヨチテコピ (『万葉集』・巻十四・郷番・詠者不明)

(4)

念ませれたマデコは 折毛不 折毛 不折毛 - 仁保敝流花乎毎見ニホヘルハナラデルゴトニ繁山之 谿敝尓生流シデャマ タニヘニオフル

(『万葉集』・巻十 九 4185 番・ 家持

延喜十九年東宮 Ŧī. 月 Ŧi. 一の御 屏風の歌、 うちよりめしし十六首

(5)あやめ 草ねなかきい 。 の ちつけはこそ 今日としなれ は人の

"貫之集"

Ι

131

引らめ

ると、 くは、引き抜こうという意であろう。 る。④は、山吹を谷から引き抜き、庭に植えるという意である。 性から、 を歌っている。 るのに、私以外の人が小野の浅茅を本気で引き抜こうとすること 地下で絡み合って、引きにくいということであり、ここの 以上の例は、 (1)は菅の根を引き抜くことが難儀との意である。 引くことにより、 ③では、引くということと、絶えることとの関係 すべて植物を引くものである。より詳しく説明す 元の場所から離れることを表現してい (2)は比喩歌である。 菅の根が 引 (5)

とは、 は は五月五日に菖蒲草を沼から引く例である。五月五日に、 これらの例から、 から離れる意であるかと考えられる。 戸に挿すか、 沼から引き抜く意と考えられる。 薬玉を作る際に使われる。 植物を引くことは、 植物 よっ 菖蒲草を沼から を引 て、 松を引く」こと 0 元の

松を引っ張り抜く意であると考えられる。

四、「松を引く」表現の出現

ろう。では、何のために、子日に野辺の松を引き抜くのか。この る。そのため、「松を引く」とは、松を野辺から引き抜くことであ ないかと考えられる。 ような行為は、子日行事が行われる場と深く関わっているのでは 既に確認したように、子日に詠まれる松は、概ね野辺の松であ

確認した子日の松詠の十一例を除くと、残りは左に示す七例であ 前述したように、子日に関する和歌は計十八首ある。第三節で

『躬恒集』(承空本)

ねのびにまかりし人におくれて

362山たかみ雲ゐにみゆるさくらばなこころのゆきてをらぬ 日ぞなき

365はるののにこころをだにもやらぬみはわかなはつまで

ねのびにまかる人におくれて

としをこそつめ

延喜六年つきなみの屏風八帖がれうのうた四十五首、せんから

じにてこれをたてまつる廿首 ねのびあそぶいへ

3ゆきてみぬ人もしのべと春ののにかたみにつめるわかな

延喜十九年東宮の御屏風の歌、うちよりめしし十六首なりけり 子日の松のもとに人人いたりあそぶ

127春の色はまだあさけれどかねてより緑ふかくも染めてけ

るかな

子日

141もとよりのまつをばおきてけふは猶おきふし春の色をこ

そみれ

子日

36春たちて子日になればうちむれていづれの人か野べにこ

ざらん

子日

切かへるさはくらくなるとも春の野のみゆるかぎりはゆか

第三節で既述したように、子日の「松」が詠まれる場所として

んとぞ思ふ

に示したように、野辺で行われるのは四例である。以上の用例か 節で確認した「松」以外の子日行事の和歌のうち、本節の傍線部 明記されているのは、「野」四例と「家」一例である。また、第三

ら、 子日行事は野辺で行われることが想定できる。 方、同じ古今集時代には、以下の用例も確認できる。

家にて子日したる所

天慶八年二月うちの御屏風のれう廿首

①わがゆかでただにしあれば春のののわかなもなにもかへり

(『貫之集』·53番)

宇多院に子日せんとありければ、式部卿のみこをさそふ

.

②ふるさとののべ見にゆくといふめるをいざもろともにわか

(『後撰集』・春上・10番・行明親王)

る。

以上の二例から、古今集時代では、子日行事が家で行われるこえられる。②では、宇多院で子日行事を行うことが記されている。から、屏風絵に子日行事が家で行われる様子が描かれていたと考から、屏風歌で、その詞書に「家にて子日したる所」とあること

め、野辺から松を引き抜き、家に植えることも行われるのである。ともあることがわかる。子日行事が家で行われるようになったた」。

それは以下の和歌例からも窺える。

子日松いへにうゑたるところ

③ちとせふるまつといへともうゑてみる 人そかそへてしる

(『伊勢集』 Ⅰ・84番)

『宇津保物語』・楼の上下(空)

ゑはべりしぞかし」と奏したまふ。七、八樹ばかりして、上木は、かの山に侍りしを、子の日におはしまして、引き植「あはれ、むかしを思ひ出ではべれば、あの岩のもとの松の

る。

て、それの成長と千年の寿命に人の長寿を祈ったものと考えられ

に平みたる松を見やりて、宮内卿兼覧

ひきうゑし子の日の松もおいにけり千世のすゑにもあひ

みつるかな

の詞書からは、松を野辺から引き、家に植えるという様子が窺え忠が催した時の屏風歌である。「子日松いへにうゑたるところ」と③は藤原時平の長男である保忠の四十賀算を、その弟である敦

に重しつ・ハー・ボボテのしっ・・・パラハウ。 とがわかる。この二例から、子日に野辺から松を引き、それを家

④からも、子日に山の松の木を引き、岩のもとに植えているこ

に植えるということが行われることがわかる。

ているが、千年の末にもまだ見られると長寿の要素を滲ませている。④では、子日に引き植えた松の木も年月を経て、老木になっまた③では、松の千年の寿命に準えて、保忠の長寿を祝ってい

を引き抜いて家に持ち帰る以上は、小松のはずであり、家に植える中の大いである。そして、子日行事が家で行われることにより、松ることもある。そして、子日行事が家で行われることにより、松ることもある。そして、子日行事が家い。一方で、家で子日が行われは、場所を野辺と明記する歌が多い。一方で、家で子日が行われるとともある。社を引きを野辺から引き、家に植える例も見られるように、松の長寿にあやかるためであろう。しかし、道真の序の松は小松ではない。松を引き抜いて家に持ち帰る以上は、小松のはずであり、家に植えるかいる。

五、終わりに

その表現は、子日行事が家で行われるようになったことにより、 出すことが出来、その相違点から行事の変化が窺える。 それの成長と千年の寿命に人の長寿を祈ったものと考えられる。 歌では、若菜と松詠が定型表現となるが、その中で、松詠の流行 取り上げられている。その影響を受け、その後、子日に関する和 皇の子日野遊に、長寿を願う目的で、若菜と松との二つの要素が 考えられる。子日行事の端緒と思しい寛平八年(八九六)宇多天 された事情を検討した。「松を引く」表現は子日行事と深く関わ いたのであろう。ただし和歌の表現からは、それとの相違をも見 長寿の要素も働いている。小松を野辺から引き抜き、家に植えて、 響されていると考えられる。その背後には、道真の序に見られる 小松を野辺から引き抜き家に植えるという、行事自体の変化に影 が見られる。特に、子日に「松を引く」という類型表現が現れる。 は見えないことから、これは古今集時代に新たに作られたものと ていると見られる。そして、子日という題材自体は古今集以前に いう表現に着目し、その形成過程を辿り、「松を引く」表現が詠出 「松を引く」表現には、宇多天皇の子日野遊や道真の序が関わって 本論では、古今集時代になってはじめて現れる「松を引く」と つ

本論文で言う「古今集時代」は、古今撰者が活躍し始め、

集』が編纂された宇多・醍醐朝から撰者たちが没する朱雀朝までを(1) 本論文で言う | 古今集時代」は、古今撰者が活躍し始め、| 古今

寺本に、番号は『私家集大成』に拠る。り、濁点の補入は論者による。また、『万葉集』和歌の訓は西本願り、濁点の補入は論者による。また、『万葉集』和歌の訓は西本願観』に拠る。そこに収めていない和歌例は『新編私家集大成』に拠特に示さない限り、和歌本文・和歌番号の引用は『新編国歌大

 $\widehat{2}$

範囲とする

前のものと考えられる。の項目によると、躬恒は延長三年に亡くなった為、この歌はそれ以の項目によると、躬恒は延長三年に亡くなった為、この歌はそれ以年次不明であるが、『古今和歌集目録』(群書類従本)凡河内躬恒

(5) 木村正中校注『土佐日記・貫之集』(新潮日本古典集成、新潮社、1000年のである。

啓一)を参照。 一年五月)における「子の日」項(室城秀之)と「松」項(久保田一年五月)における「子の日」項(室城秀之)と「松」項(久保田保田淳・馬場あき子編『歌ことば辞典』(笠間書院、平成十一年六月)、久

(伊井春樹編『古代中世文学研究論集 第三集』、和泉書院、平成十今集時代から後撰集時代への屏風歌の変化―子日をめぐって―」(『屏風歌の研究 論考篇』、和泉書院、平成十九年三月)、初出「古) 田島智子「後撰集時代・拾遺集時代の特色―子日をめぐって―」

三年一月)。

- 8 山中裕 『平安朝の年中行事』(塙書房、昭和四十七年六月)。
- 9 **倉林正次『饗宴の研究』(文学編)(桜楓社、昭和四十四年一月)。**
- $\widehat{10}$ 月。 初出 北山円正『平安朝の歳時と文学』(和泉書院、平成三十年十月)、 「子の日の行事の変遷」(『神女大国文』十七号、平成十年三
- 11 清文堂出版、平成十六年十月)。 谷口孝介『菅原道眞の詩と学問』(塙書房、 「宇多天皇雲林院子日行幸と菅原道眞」(『説話論集』第十四集、 平成十八年二月)、
- 12 和五十三年三月)。 井上薫「子日目利箒小考」(『龍谷史壇』第七十三・第七十四、 昭

13

新訂增補国史大系『類聚国史』(吉川弘文館、

昭和八年~

昭和

九

- 14 川口久雄校注『菅草文草・菅家後集』(日本古典文学大系、 岩波
- 15 書店、昭和四十一年十月)。 同 14 。
- 16 月六日の条にも野遊の模様が記録されている。 四年二月)。また、『日本紀略』(新訂増補国史大系) 寛平八年閏正 三木雅博『紀長谷雄漢詩文集並びに漢字索引』(和泉書院、 師。未時。更幸,船岡。放,鷹犬,追,鳥獸。 雲林院。皇太子以下王卿陪云々。以,院主大法師由性,爲,權律 閏正月六日戊子。天皇爲||遊覽|。幸||北野|。午刻先御||各流 平成
- 17 八月)延喜五年正月二十九日の条に依る。 『日本紀略』後編(新訂増補国史大系、 吉川弘文館、 昭和四十年
- 18 とは異なるものである。 に引き寄せて、その枝を結ぶものであり、本論での「松を引く」例 の枝をひきむすぶ」和歌は一例あるが、それは松の枝を自分の近く 163・〜一分があり、松の枝を結ぶことが詠まれている。その中で、「松 『万葉集』では、「松をむすぶ」の用例は六例 141 143 144 146

- 19 成十一年六月~平成十四年八月)。 中野幸一校注『うつほ物語』(新編日本古典文学全集、小学館、 平
- ほ・こうえん 本学大学院博士後期課程